



宇宙食になったサバ缶

小坂康之・別司芳子著 小学館

「ここでつくったサバ缶を、宇宙に飛ばせるんちゃう？」

水産高校生の何気ない言葉からスタートして13年、先輩から後輩への技術の継承と厳しい審査基準を創意工夫で一つ一つ乗り越え、宇宙でおいしく食べられるまでの軌跡を描く。さいたま市出身の宇宙飛行士若田光一さんもサバ缶を試食、「まろやかでご飯に合うよね！」と大絶賛しています。